

防災を考える 危機に備えて

中央防災会議(内閣府)は、平成24年8月29日、南海トラフで発生する地震について新たな被害想定を発表しました。発生時間帯を冬の深夜とした最悪のケースにしたことからその被害想定の数値は衝撃的なものでした。それに対して有識者会議は「正しく恐れてほしい」と要請しています。地道な対策や訓練が「減災」につながることを示唆しています。今後、自治体や企業は、防災対策を進めることになります。行吉学園も地震や津波も含めた危機管理を一層進めます。今回は、防災や危機に備える取組みを紹介します。

阪神・淡路大震災を経験した行吉学園の今後の防災への思い 行吉学園 理事長 行吉 誠之



行吉学園 行吉誠之理事長

1995年1月17日午前5時46分、淡路島を震源地とする直下型巨大地震(阪神・淡路大震災)が発生し、6千名を超える犠牲者を出した大惨事となった。本学も三宮学舎が大きな被害を受け、校舎1棟が全壊と認定され取り壊しを余儀なくされた。幸いにして短期大学と本部は1992年にポートアイランドに移転しており、運営に大きな支障は出なかった。しかしながら、発生時は学生の安全確認を最優先し、集まった教職員で手分けし個別に確認作業が行われた。大学で2名の学生が下宿先で犠牲になっていたのが、悲しく無念の報告であった。ポートアイランドの短大・本部、須磨の大学では揺れによる致命的な被害はなく、

新学期は多少の混乱はあったものの平常に授業は進められたと記憶している。

このような大震災は今後数十年間起こらないであろうと思われていた矢先の2011年3月11日、三陸沖を震源地とする巨大震災が発生した。東日本大震災と名付けられた震災は、震源地が海洋であったため巨大津波を引き起こし、2万名近い犠牲者を出す世界でも例を見ない未曾有の大惨事となった。更に、津波による原子力発電所事故を誘発し、その対応をめぐる人災であるとの議論もなされている。今回の犠牲の大半は津波が原因であることから、今後の地震対策は揺れと共に津波対策が大きく取り上げられることになった。予想津波の高さも倍くらいに変更され、国・県をはじめとして市町村、地域、事業所等でその対策の策定が急がれている。本学の学舎は最新の耐震基準を満たしているため、揺れに対する備えはできているといえるが、今回の震災で経験した津波についての対策は万全とはいえない。ポートアイランドキャンパスでは、学生の津波の避難場所としては、学舎の高層階への避難が考えられている。また、ポートアイランドキャンパスには本部があり、重要書類が地下に保管されていることから、津波対策として三宮キャンパスへの移転を行ったところである。

大事なことは、想定できるあらゆる時間帯での震災発生時のパニック状態のなかで、いかに秩序だった避難が行えるかということであり、日頃の訓練と備えの大切さを大いに認識することが必要である。



須磨消防署「防災協力事業所」に神戸女子大学(須磨キャンパス)登録

平成24年7月2日(月)付で神戸女子大学は、想定外の災害発生時、その状況下で何らかのできることをする主旨から神戸市須磨消防署「防災協力事業所」に登録しました。

「避難救護場所の提供」と登録証には記されていますが、このことだけに限定・拘束されるわけではありません。

災害連絡員と防災協力事業所の関係を消防署は「はちどりネット」と称しています。「森が燃えて多くの動物が逃げる中、一羽の小さなハチドリだけがくちばしで一滴のしずくを何度も運んでいたという」アンデス地方に伝わる民話から、その名称が生まれたようです。小さな力であっても自らのできることを行うとして、医療機関、交通事業者、建設業、製造業者、大学等が防災協力事業所に登録しています。



守衛室に「はちどりネット」マークを掲示

教職員研修会「神戸市の危機管理」を学ぶ

平成24年8月2日(木)神戸女子大学須磨キャンパスにおいて防火・防災管理委員会主催で、神戸市危機管理室震災教訓・発信担当主査 高田 一也氏を講師に招き「神戸市の危機管理」と題して危機管理に関する研修会が開催され、約100名の教職員が参加しました。



神戸市危機管理室
震災教訓・発信担当係長、
博士(経済学)、ITストラテジスト
高田一也氏

高田氏は阪神・淡路大震災の経験から進めてきた神戸市の防災対策計画についての説明と東日本大震災の被害状況と神戸市が行った支援を紹介されました。そして、東日本大震災の教訓を生かして、見直された今後発生する確率の高い東南海・南海地震による津波対策について詳細なデータを提示されました。

災害時の企業の役割についても述べられ、神戸市須磨消防署「防災協力事業所」に登録した神戸女子大学にとって、非常に参考になりました。また、教職員一人ひとりがすぐに実行できる災害時の対策を具体的に教示されました。

ハード面の整備対策を常に見直す重要性に加え、個人が防災に対する危機管理の意識をもつことがいかに大切であるか理解できました。

危機管理マニュアル

神戸女子大学・神戸女子短期大学では、キャンパスごとに危機管理マニュアルを順次作成しており、今春には全て完成します。立地条件が異なる二つのキャンパスの特徴を踏まえた内容になります。

このマニュアルは、兵庫県内及び近隣の府県において大規模自然災害の発生が予想される場合において被害を未然に防止し、被害を最小限にとどめるために防災の組織、災害時の具体的な対応方法を定めています。

また、大規模自然災害時の対応以外の学内外における事故・事件などに対する防止や災害時の具体的な対応方法を定めています。

南海トラフの解説

東海から四国、九州東部の太平洋側に延びる水深4,000メートル級の海底の溝(トラフ)。日本列島が乗る陸側プレート(岩板)の下にフィリピン海プレートが沈み込む場所で、東海・東南海・南海地震が100~150年間隔で繰り返し発生する。

恒例の防災訓練紹介

須磨キャンパス消防訓練



放水訓練を行う消防団の学生

平成24年度の消防訓練が平成24年10月4日(木)須磨キャンパスで行われました。

防火・防災管理委員会の計画によるもので、現場確認、非常連絡訓練、非常放送訓練、消火栓・消火器による消火訓練でした。

神戸市須磨消防署から、藤井 茂樹査察担当係長以下5名の消防署員に立会っていただき、神戸女子大学 波田 重熙学長はじめ多数の教職員と学生が参加しました。

一連の通報訓練の後、参加者はA館の噴水前に集合して自衛消防隊初期消火班、消防団員として活躍している2名の学生が消火栓を使って放水訓練を行いました。

「ホースは重く水圧がかかります。筒先をしっかり持って火元に向けてください」との消防署員の方からのアドバイスを受けて、一般の学生も2~3人が一組になってホースを持ち、水圧の強さに驚きながらかわるがわる「的」に向かって放水しました。

藤井査察担当係長の講評では、防火の心得や消火方法とともに「火災になった時は、冷静に火事の場所を119番に連絡することが何より大切で、住所と目印になるものも合わせて通報してください」と話されました。

ポーアイ4大学連携の防災訓練

第4回目となるポーアイ4大学(注)総合防災訓練(ポーアイ4大学連携推進センター主催)が、平成24年10月15日(月)神戸市水上消防署、兵庫県神戸市水上警察署、神戸市水道局中部センターのご協力で行われ、4大学の学生、教職員、地域の住民の方を含め約350名が参加しました。



ヘリコプターで搬送のデモンストレーション

(注)ポーアイ4大学とは、神戸学院大学・神戸女子大学・兵庫医療大学・神戸女子短期大学をいう。



グラウンドに避難した教職員と学生たち

ポートアイランドキャンパス

スでは、最初に緊急地震速報システムのテスト放送を受けて、学生は2時限目の授業担当教員の誘導に従い、教室から避難経路を確認してグラウンドに避難しました。

その後、学生と教職員は、神戸学院大学へ移動し、逃げ遅れた重傷者を4階から救出し、ヘリコプターで搬送という設定でのデモンストレーションを見学しました。昨年に引き続き津波対策としての警報発令に伴う避難訓練も行われました。

地域とともに防災に取り組む

神戸女子大学の学生は消防団員としても活躍中です。神戸市は平成22年度から市消防団条例を改正し、通学地の消防団に入ることが可能になりました。それに伴い、神戸女子大学では主体的に入団に協力することにより、「消防団協力事業所」として認定されています。過去3年間で合計14名の学生（現在12名が在籍）が神戸市須磨消防団に入団しました。

学生団員は、消火訓練や救急講習で地域の方を指導するなど、防災イベントに参加して市民向けの広報活動に取り組んでいます。学内外でも防火意識を高める役割を担っています。

今年度も4名の学生が神戸市須磨消防団に入団

平成24年10月4日（木）神戸市須磨消防団に入団した学生への辞令交付式が須磨キャンパスで行われました。

今年度は4名の学生が入団しました。4名の学生は高木 優和須磨消防団長から一人ひとり辞令を手渡され、代表の学生が力強く宣誓をしました。

前田 研史学生部長と高木消防団長から学業と消防団員としての活動を両立して活躍してくださいと励ましの言葉が贈られました。



高木優和消防団長に宣誓書を渡す学生

平成24年入団の学生消防団員 初めての活動

平成24年10月14日（日）神戸市須磨区横尾椿谷公園において開催された第13回須磨区防災福祉コミュニティ大会（須磨区防災福祉コミュニティ等連絡会議主催）で新しく消防団になった4名の学生が初めての活動を行いました。

この大会は神戸市須磨区で結成された防災福祉コミュニティ21団体が集まり、身近で起こる災害にあわず対応できるように、実践に即した訓練を実施することにより、住民による自主防災体制の充実と防災意識の高揚を図ることを目的に開催されています。

4名の学生は須磨区内の21地区の防災福祉コミュニティ、須磨消防団、須磨消防署、婦人防災安全委員の方々等、約800名の参加者の前で一人ひとり紹介されました。

消防団員となった学生は、地震と津波を想定した総合訓練を見学し、消防車の機能についての説明を受けたあとスモークマシンで煙が充満したテント、地震体験車「ゆれるん」などで災害時の疑似体験をしました。

毛布と竹竿で簡易担架を作り負傷者を搬送する実習と放水訓練も行い、今後の消防団員としての活動するための基礎的な知識や技術の一端を学びました。

消防団員となった学生には、地域の皆様とのつながりを強め、防災意識を高めていただくための活動が期待されます。



参加者の前で紹介される消防団員の学生



負傷者を搬送する実習